

セココの靈性について No.1

「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」（マタイ 25 章 40 節）

五つの奉仕

1. 人々を物質的に助ける
2. 人々を導く
3. 人々のために祈る
4. 人々を喜ばせる
5. 人々への思いやりの言葉

聖フランシスコの「与えることによって与えられる」や「上からではなく同じレベルで」の言葉は、「奉仕と分かち合い」のSECOの会員が自分の内に育てていかなければならないものとして、しっかり受け止めている。

また、本当の大人としての条件として「自己奉獻」、そしてイエス・キリストこそ大人の模範として仰いでいる。

セココの靈性について

ホアン・カトレット神父様による第一回講話より要旨

『第一に奉仕する人』

第一に奉仕する人とは誰か。キリストの模範を調べながら深めてみたい。ヨハネ 13 章 1～17 節によると、キリストが「たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い……」と書いてある。これは行いの教えである。人々は皆互いに奉仕すること。たがいに助け合うこと。従ってキリストの模範はSECOの靈性の根本にあたる。

今各国の社会福祉を見ると身体の不自由な人々を保護するため国家としての法律が出来ている。例えば、駅、公共的建物、教会等で車椅子を使用できるところが増えている。しかしこのような社会福祉が生まれる頃には、現在聖人と呼ばれるような、例えばフランスのボルノーセルビセントや愛徳のための模範的な人、インドのマザーテレザがいる。言い換えれば今日までの愛徳は社会正義と社会福祉に変わってきた。そのような奉仕活動の根本には何があるだろうか。キリストの教えである。人は死ぬ時、神のみ前に出た時、どんな計りで裁かれるであろうか。それは愛と奉仕の計りである。

マタイ 25 章 31～46 節の中心となるところ、『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』キリストからみるとわたし達が他の人のためにした事は神にしたことを意味するのである。

◆ 果物の木を植えた年よりの話 ◆

「自分はこれからそれ程長くは生きていられないだろうけれど、今迄美味しく食べていたリンゴ、柿、梨は、わたしより前の他の人がわたし達のために植えてきた。だからわたしも後の人たちのために感謝の気持ちを持って今植えている。」 この精神は上から何か物を与えると言うのではなく、同じレベルで奉仕する。

◆ アシジの聖フランシスコの『平和の祈り』 ◆

この祈りの中には与えることによって与えられると書いてある。インドのマザーテレザは自分にとって貧しい人、死んでいく人は自分の恩人であると考えた。なぜならその様な人は彼女にとって奉仕できる喜びを与えてくれるからだ。何も持っていない人は人から与えられるばかりでなく、逆にわたし達に喜びを与えてくれるから恩人である。その様な感じ方こそ与えることは同時に与えられることが含まれていることを教える。

◆ 大人の基準（オブラティビティ） ◆

自己奉獻と言う意味であるが、大人の基準は自己奉獻することである。言い換えればキリストこそ大人の模範である。人の成長を見ていると大きく二つの段階がある。

幼児から成年までは貰うことによって成長する。即ち貰うことから始まる。然し社会人になる第二段階としてペルソナ（即ち格、大人であることを表す）は与えることによって大人になる。社会に出たらあなたは何を与えることができるかということである。どんな奉仕ができるか。その時社会に自己奉獻ができるかを表すことによって人々はもっと幸せであろう。自分のための利益、儲けることばかり考えていたら良い奉仕ではない。

◆ 五つの奉仕 ◆

第一 『パンと水』

飢えている人々を助ける奉仕。即ち羊と山羊の喩話のように飢えている時食べさせてくれた。裸の時に着せてくれた。喉が渴いていた時に飲ませてくれた。この様な奉仕は一番先にくる。フィリピンのような第三世界と呼ばれる国へその様な食べ物、薬や衣類を送るのは第一の奉仕である。

第二 『責任の奉仕』

責任を持って人々を導く奉仕。両親として子供たちを導く、家族を導く。然し、同時に国内の困っている人々を導く。国内だけでなく世界のあちらこちらに向かって一人ひとりが責任を感じなければならない。

なぜいまだに至るところで紛争、戦争、憎しみ合い、犯罪などが起きているのだろうか。分かち合いが足りないからである。テロ、ゲリラの続発。これに打ち勝つためには、警察や軍隊の力に頼るよりは、現在の国の富の公平な分かち合いによる以外には根本的解決策はない。人が悪いことをするのは、その根本にある責任を感じないからである。

第三 『とりなしの祈り』

人々のために祈ること。人々が恵まれるように世界の人々のために良い望みを抱くこと。

第四 『慰めの奉仕』

人々を喜ばせる微笑み。 困っている人、淋しい人に思いやりの言葉や挨拶、家庭の事、社会の事で人々を喜ばせる希望を与える奉仕である。

ここにヨハネ・パウロ一世の話がある。『微笑みの教皇』は聖書の「最後の審判」に基づいて、『ある長い列の中に一人のアイランド人がいた。』と書いた。そのアイランド人は「最後の審判」に近づいた時、神はある人の人生書をとって「あなたは飢えた時食べさせた。入りなさい。病气している時見舞いに来た。入りなさい。」と言っているのを聞いて、『わたしは人に何もしたことがない。』どうなることかと震えていた時、キリストはその人を見て「あなたは他に何もしてくれなかったけど、わたしを笑わせてくれた。天国へ入りなさい。」と言われた。アイランド人は愉快な人種と思われていたので教皇はそれを例にとった。笑いの奉仕、慰めの奉仕は人に平安、落ち着きを注ぎ与える。

第五 『言葉の奉仕』

言葉は人間の特別な能力である。

わたしはヨハネ、マタイ、ルカを引用してきたが、それは神のみ言葉を紹介する奉仕をしている。このように私たちは聖書の神のみ言葉を度々聞かされるから、なるほど、これこそ素晴らしい模範、それを

聞くとその様になりたいと思う。これは奉仕を受け入れた人の心の動きである。

最後に役に立たない現存の重要性。

例えば、ある病人を見舞いに行ったとする。そこに一緒に居ること以外何も出来ないけれど、実は一番役に立っているのである。暫く居るだけ（現存）で、大きな慰めになっている。皆その様な立場になった時、それが大きな慰めであることが解る。

SERVIZIO E CONDIVISIONE 奉仕と分かち合いの最初の霊性。

奉仕する相手が何を必要としてかを判断することが重要である。

